# 北陸歴史探訪

金沢学院大学 名誉教授
東四柳 史明（ひがしよつやなぎ ふみあき）

## 第21回 織田信長の越前制圧と一向一揆

石垣が残る越前府中城址（前田利家築城、現越前市役所）

天正２年（1574）正月、越前で蜂起した真宗本願寺門徒による一向一揆は、翌２月上旬に、加賀より金沢御堂の七里頼周（本願寺坊官）を招請して体制を強化し、織田信長方に転じた旧朝倉系の降将等を討滅・追放して、越前を「一揆持ちの国」とした。※

大坂の石山本願寺から下った坊官の下間頼照が坂井郡豊原寺（現坂井市丸岡町）を本拠に総大将となって一国を差配し、杉浦玄任が大野郡、下間和泉（頼照の子息）が足羽郡、七里頼周が越前府中以西を分割支配する体制がとられ、同年８月以降には、織田軍の越前再侵攻に備え、南条郡と敦賀郡の境目付近で防禦を固めていた。しかし内部では、織田方の大軍来襲への恐れから、一揆勢の結集ははかどらず、逃亡し脱落する門徒衆もいた。

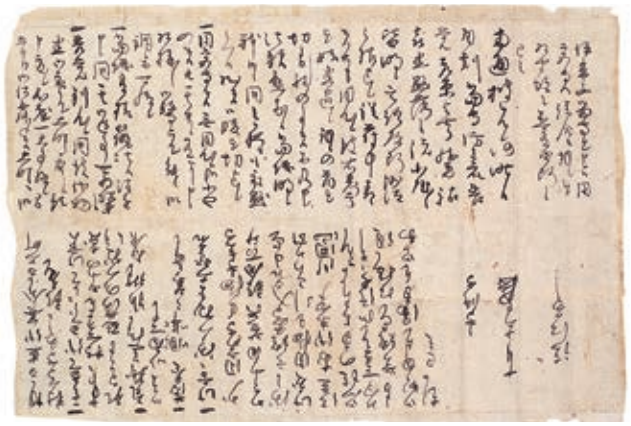
### 信長軍の再攻と府中陥落

天正３年（1575）８月14日、織田信長の越前侵攻が始まり、この日夕刻に、信長は敦賀に下着。翌15日、木ノ芽峠口と浜方の二手から進撃が開始され、浜方の惟任（明智）光秀軍が所々を放火しながら進み、大塩円宮寺や加賀衆らが守る一揆方の杉津城（現敦賀市）などを攻崩し、夜になって府中（現越前市武生地区）に入った。

また16日には、信長率いる織田軍が、木ノ芽・鉢伏砦（現南越前町）を攻め落とし、一揆方の西光寺・下間和泉・若林甚七郎・豊原西光院・朝倉（安波賀）三郎等を討ち取り首を刎ねた。さらに信長は、軍勢を四手に分け、山々谷々を隈なく捜索し続けた。

この間、羽柴秀吉は光秀と相談し、密かに15日夜中に府中に潜入、同町に攻め込んだ明智方と共に、信長軍に追われて逃げ帰った一揆方の残党を待ち受けた。案の定、敗残の一揆衆が500、300と逃れてきたのを府中で捕らえて1500程首を切り、近辺に逃れ来た敗残兵を含め、2000余の首級を討ち取ったとみえる。

その結果、15、16両日の間に、越前一国は織田軍にほぼ制圧された。このとき府中町は、多くの死骸で埋め尽くされたとされる。信長は16日に、府中龍門寺城に進んで陣を構え、その後、越前の各地に織田方部将を向かわせ、一揆勢の掃討戦を展開した。



専修寺賢会書状（坂井市三国町 勝授寺蔵）
鉢伏山に籠城する一揆勢の統制が崩れつつあることが記されている

※ 天正元年（1573）信長による朝倉討伐後、信長は朝倉方から寝返った桂田長俊を守護代に任じたが、翌２年１月、長俊と対立する朝倉旧臣富田長繁や一揆衆らにより討ち取られた。その後、富田長繁と一揆衆との間に対立が生じ、一揆衆は本願寺坊官の七里頼周や下間頼照らの助けを得て長繁を討ち取り、越前は「一揆持ちの国」となった。

## 北庄進出と一揆掃討

８月17日早朝になって信長は、府中を発ち、正午頃に北庄（現福井市）に本陣を移した。同日、信長の許に2000余の首級が届き、生捕70～80人も連行されたが、即刻全員が打ち首となった。次いで18日には、信長の陣に、越前の方々より500、600などと、続々数え切れない程の一揆衆の首級が持ち込まれた。

『信長公記』によれば、8月15日より19日までに、捕縛・連行後に殺害された人数は、１万2250余とみえ、各地で切捨、生捕・誅殺された分を合わせると４～５万人に及んだとされる。

19日、信長は子息の北畠信意（信雄、次男）・神戸信孝（三男）と長野信包（信長の弟）に、織田方部将の原田直政・滝川一益勢600余騎を副え、これに氏家直通・武藤舜秀勢300余と柴田勝家・惟住（丹羽）長秀軍を加えて、一揆方の安波賀（朝倉）与三らが楯籠もる要害を攻略、600余人を討ち取り、100余人を生捕り斬首した。

また20日には、部将の菅屋長頼・前田利家と馬廻衆を、雛ヶ岳（日野山、現越前市武生地区東南部）に遣わし、1000余人を切捨て、生捕った100余人を刎首に処している。さらに北畠信意・滝川一益勢を、一揆衆が集結する今立郡の大滝（現越前市）に攻めさせ、600余を討ち取った。このほか平野定久率いる一揆方鉄砲衆の多くも討滅された。

21日になると、部将佐久間信栄から信長に、500余を討ち取り、生捕り10余人を斬首した報が伝えられ、この日、信長は、丹生郡の風尾要害（現福井市風尾町）に楯籠る一揆方の朝倉景健からの降伏願いを拒絶して自害させ、その被官金子信丞兄弟の首を刎ねていた。そのほか柴田勝家・惟住長秀から、1000余人を討ち取ったとの知らせがあり、氏家直通・武藤舜秀方より、二箇所の谷を撫で斬りにし、討ち取った数は知れずとの報告もあった。

一揆勢の総大将であった下間頼照は、その頃、竹杖をつき竹笠姿に身をやつし、風尾要害を頼って逃れる途中、織田方に味方する土地の者に捕らえられ、斬首された頸が、信長の許に届けられており、信長は「誠に気を散じ候」（鬱憤を晴らした）と歓喜した。

小丸城跡から出土した文字瓦
（味真野史跡保存会蔵）
利家による一揆衆の処刑が記される

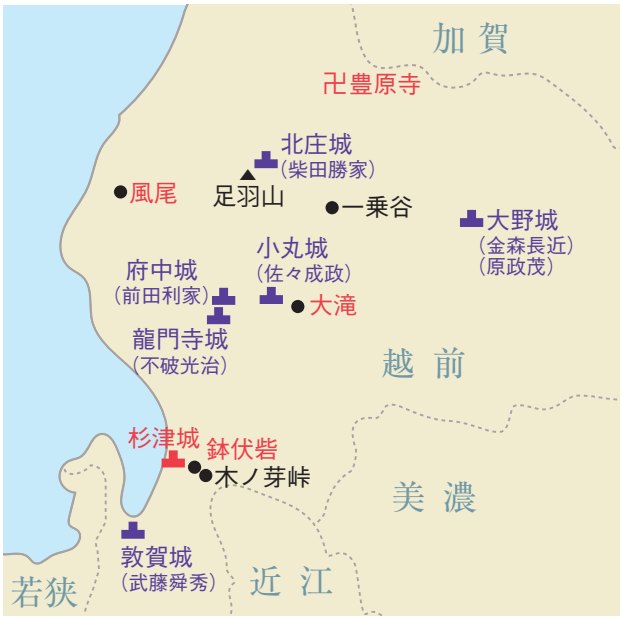
## 織田領国の確立と越前国分け

越前を平定した信長は、８月23日に、陣を北庄から以前朝倉氏の城下町であった一乗谷に移し、同月28日には、豊原寺へ陣を寄せると、先に信長から許された堀江景忠や小黒西光寺らが、赦免の礼に訪れた。越前制圧の余勢をかった織田軍は、その頃、加賀南部に進んで江沼・能美両郡を制圧し、江沼郡の檜屋城と大聖寺山（現加賀市）には、別喜右近・佐々長秋らの部将が配置された。

９月２日になって豊原寺から北庄に戻った信長は、越前国支配を確立する国分けを実施した。そこでは越前国のうち８郡は、国主的地位の柴田勝家の支配下とされた。また国内の大野郡の３分の２が金森長近、３分の１は原政茂に下され、府中周辺の２郡は、勝家の目付役となった不破光治・佐々成政・前田利家の３人が、共同で統治することになり、敦賀郡は武藤舜秀の支配となった。

同月14日から、北庄の足羽山に、織田氏による越前支配の陣屋普請が始まったが、信長の許へは、越前・加賀両国の諸侍の多くが、帰参の御礼に馳せ参じ、門前市をなす観を呈していた。やがて越前の平定を終えた信長は、９月23日になって、北庄を発ち、同月26日に岐阜城に帰った。

しかし越前における一揆の掃討はその後も続き、翌天正４年５月24日にも一揆が起こり、前田利家がこれを制圧した際、一揆衆1000人余を生捕り、磔・釜煎りの刑に処したことが、府中小丸城跡（現越前市五分市町）出土の文字瓦の銘文に刻まれている。




越前制圧後の織田勢の配置